

【 復活のトロパリ 第1調 】

きゆ うせ え いしゆよ、 イウ デヤの ひとはかを  
 救 世 主 人 墓  
 ふ うじて 、 へい そつなんぢの いさぎよきみを  
 封 兵 卒 爾 潔 軀  
 ま も る と き 、 なんぢ はみっかめ に ふくか つ  
 守 時 爾 三 日 目 復 活  
 して 、 せ か い に い の ち を た ま え り 。  
 世 界 生 命 賜  
 ゆ え にてんぐんはなんぢい の ち を ほ ど こ す の  
 故 天 軍 爾 生 命 施  
 しゆに よ べ り 、 ハリスト スよ 、 こう えい は  
 主 呼 光 榮  
 なんぢ の ふくか つ に き し 、 こ お えい はなんぢ  
 爾 復 活 歸 光 榮 爾  
 の く に に き す 、 ひ と り ひ と を い つ く し む  
 國 歸 獨 人 慈  
 しゆ よ 、 こう えい はなんぢ の おもんぱ かり に  
 主 光 榮 爾 慮  
 き す 。  
 歸

【 前驅授洗イオアン誕生祭のトロパリ 第4調 】

ハリストスの こうりんの よげんしゃおよびぜんくよ、  
 降 臨 預 言 者 及 前 驅

われらあいをもってなんぢをとうとむものは、  
我 等 愛 以 爾 尊 者

いかによろしきにかないてなんぢをほめあぐる  
如何 宜 合 爾 讚 揚

をしらあず、けだしなんぢのこうえいそん  
知 蓋 爾 光 榮 尊

きなるたんじょうにて、うみしものむけっかお及  
貴 誕生 生 者 無 結果 及

よびちちのむごんはとかあれ、かみのこ  
父 無 言 解 神 子

がみをとることはせかいにつたえら  
身 取 世 界 傳

る。

【 前驅授洗イオアン誕生祭のコンダク 第3調 】

こうえいはちちとことせいしんにきい  
光 榮 父 子 聖 神 歸

いす、

さきにむけっかなるものはこんにちハリストスのぜんく  
先 無 結果 者 今日 前

をうむ。かれはおよそのよげんのじゅ  
生 彼 凡 所 預 言 充

うま ンなり 、 けだししよよげんしゃの つたえし  
 満 蓋 諸預言者 傳

もの 、 このものにかれはイオルダンに おいて  
 者 者 彼 於

てをのせえて 、 かみのことばのよげんしゃ、  
 手 按 神 言 預言者

でえんどうしゃ 、 ともにまたぜんくとあらわれ  
 傳道者 共 亦 前 驅 現

たあり。

【 復活のコンダク 第1調 】

いまもいつもよよに、アミン  
 今 何 時 世 世

しゅさいよ、なんぢはかみなるによりてこう  
 主宰 爾 神 因 光

えいのうちに はかよりふくかつし、せせ  
 榮 中 墓 復 活 世

かいをもともにふくかつせしめたまえり。  
 界 借 復 活 給

ひとのせいはなんぢをかみとしてほめう歌  
 人 性 爾 神 讚 歌

たい、しはほろぼされ、アダムはたのし  
 死 滅 樂

み、エヴァはいまなわめよりとかれ  
 今 縛 釋  
 てよろこびてよぶ、ハリストスよ、なんぢ  
 觀 呼 爾  
 はしゅうじんにふくかつをたもうしゅなり。  
 衆 人 復 活 賜 主

司祭) ( 黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、  
 ヘルヴィムより讚榮せられ、悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有と  
 なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、  
 願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行つる者を棄てずして、其救の爲に痛悔  
 を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な  
 る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拜讚榮を奉るに堪うる者と  
 なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を  
 もつわれらのぞわれらおよじゆうじゆうつみゆるわたましいからだ  
 を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる生  
 しんぢよこせいなんぢよろこびなしよせいじんきとうよ  
 神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、 )

司祭) 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世  
 に、

ア ミ ン。

【 聖三祝文 】

せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる  
 聖 神 聖 勇 毅 聖

じょう せい の も の よ、 わ れ ら を あ わ れ め  
 常 生 者 我 等 憐

よ 。 せい なる か み、 せい なる ゆ う き、 せい  
 聖 神 聖 勇 毅 聖

なる じょう せい の も の よ、 わ れ ら を あ わ れ  
 常 生 者 我 等 憐

め よ 。 せい なる か み、 せい なる ゆ う き、  
 聖 神 聖 勇 毅

せい なる じょう せい の も の よ、 わ れ ら を あ わ  
 聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 こう え い は ち ち と こ と せい しん  
 光 榮 父 子 聖 神

に き す、 い ま も い つ も よ よ に、 ア ミ ン。  
 歸 今 何 時 世 世

せい なる じょう せい の も の よ、 わ れ ら を あ わ  
 聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 せい なる か み、 せい なる ゆ う  
 聖 神 聖 勇

き、 せい なる じょう せい の も の よ、 わ れ ら を  
 毅 聖 常 生 者 我 等

あ わ れ め よ 。  
 憐

司祭) ( 黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國

こうえい ほうざ あ つね あが ほ いま いつ よよ  
の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、 )

【 プロキメン 提綱 主日第1調 及び前驅授洗イオアン誕生祭の 第7調 】

司祭) つつし き しゅうじん へいあん  
慎みて聽くべし、衆人に平安、

誦經) なんぢ しん  
爾の神にも、

司祭) えいち  
睿智、

誦經) プロキメン、しゅ われらなんぢ たの ごと なんぢ あわれみ われら た たま  
プロキメン、主よ、我等爾を頼むが如く、爾の憐を我等に垂れ給え、

しゅ よ 、 わ れ ら なん ぢ を た の む が ご と く 、  
主 我 等 爾 頼 如  
なん ぢ の あ わ れ み を わ れ ら に た あ れ え た あ ま  
爾 憐 我 等 垂 給  
え 。

誦經) ぎじん しゅ ため よろこ さんえい ぎしや かな  
義人よ、主の爲に喜べ、讚榮するは義者に適う、

しゅ よ 、 わ れ ら なん ぢ を た の む が ご と く 、  
主 我 等 爾 頼 如  
なん ぢ の あ わ れ み を わ れ ら に た あ れ え た あ ま  
爾 憐 我 等 垂 給  
え 。

誦經) ぎじん しゅ ため たの かれ たの  
義人は主の爲に樂しみて、彼を恃まん、

ぎ じ ん は しゅ の た め に た の し み て 、 か れ  
義 人 主 爲 樂 彼



【 アポストロス 使徒経 81 半端 ロマ書 2 章 10 節～16 節  
112 端 ロマ書 13 章 11 節～14 章 4 節 】

司祭) 睿智、

誦経) 聖使徒パウエルがロマ人に達する書の讀、

司祭) 謹みて聽くべし、

誦経) 兄弟よ、光榮と尊貴と平安とは、凡そ善を爲す人、先づイウデヤ人、次にエルリン人  
に至らん、蓋神には偏視することなし。凡そ律法なくして罪を犯しし者は、律法なく  
して滅び、律法ありて罪を犯しし者は、律法に由りて審判せられん、(蓋律法を聞  
く者は神の前に義なるに非ず、乃律法を行う者は義とせられん、蓋律法を有た  
ざる異邦人等、性に率いて律法の事を行う時は、律法を有たずと雖、自ら己  
の律法たるなり、彼等は律法の工の其心に銘されたるを彰す、此れ彼等の良心、  
及び互に貶め、或は褒むる思慮の證する所なり、) 即神がイイスス ハリストス  
を以て人の密事を審判する日に於てす、我が福音する所の如し。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) 善を行うすべての人には、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、光榮とほまれと平安とが与えられる。なぜなら、神には、かたより見ることがないからである。そのわけは、律法なしに罪を犯した者は、また律法なしに滅び、律法のもとで罪を犯した者は、律法によってさばかれる。なぜなら、律法を聞く者が、神の前に義なるものではなく、律法を行う者が、義とされるからである。すなわち、律法を持たない異邦人が、自然のまま、律法の命じる事を行うなら、たとい律法を持たなくても、彼らにとっては自分自身が律法なのである。彼らは律法の要求がその心にしるされていることを現し、そのことを彼らの良心も共にあかしをして、その判断が互にあるいは訴え、あるいは弁明し合うのである。そして、これらのことは、わたしの福音によれば、神がキリスト・イエスによって人々の隠れた事からをさばかれるその日に、明らかにされるであろう。

\*\*\*\*\*

誦経) 兄弟よ、斯く行ふべし、今は我等が寐より寤むる時既に至りしを知ればなり、今は  
我等が初めて信ぜし時に較ぶれば、救は更に我等に近し。夜過ぎて晝邇づけり、故に

われらくらやみ おこない のぞ ひかり よろい き われらひる あ ごと おこない うるわ  
 我等昏昧の 行 を除きて、光明の 甲 を衣るべし。我等晝に在るが如く、 行 を美し  
 くとすべし、饕餮及び沈湎好色 及び邪侈、争闘及び嫉妬すべからず。乃 爾等は我  
 が主イイスス ハリストスを衣よ、肉體の 慮 を慾に變ずる勿れ。信の弱き者は、意  
 見を詰らずして之を納れよ。蓋 或人は凡の物食うべしと信じ、弱き者は野菜を食  
 う。食う者は食わざる者を 藐る勿れ、食わざる者は食う者を議する勿れ、蓋 神は彼  
 を納れたり。爾は何人にして他人の僕を議するか、彼は己の主の前に立ち、或は倒  
 る。且彼は立てられん、蓋 神は之を立つるを能す。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳)、あなたがたは時を知っているのだから、特に、この事を励まねばならない。すなわち、あなたがたの眠りからさめるべき時が、すでにくてきている。なぜなら今は、わたしたちの救が、初め信じた時よりも、もっと近づいているからである。夜はふけ、日が近づいている。それだから、わたしたちは、やみのわざを捨てて、光の武具を着けようではないか。そして、宴樂と泥酔、淫乱と好色、争いとねたみを捨てて、昼歩くように、つつましく歩こうではないか。あなたがたは、主イエス・キリストを着なさい。肉の欲を満たすことに心を向けてはならない。信仰の弱い者を受けいれなさい。ただ、意見を批評するためであってはならない。ある人は、何を食べてもさしつかえないと信じているが、弱い人は野菜だけを食べる。食べる者は食べない者を軽んじてはならず、食べない者も食べる者をさばいてはならない。神は彼を受けいれて下さったのであるから。他人の僕をさばくあなたは、いったい、何者であるか。彼が立つのも倒れるのも、その主人によるのである。しかし、彼は立つようになる。主は彼を立たせることができるからである。

\*\*\*\*\*

【 アリルイヤ 主日第1調 及び前驅授洗イオアン誕生祭の 第1調 】

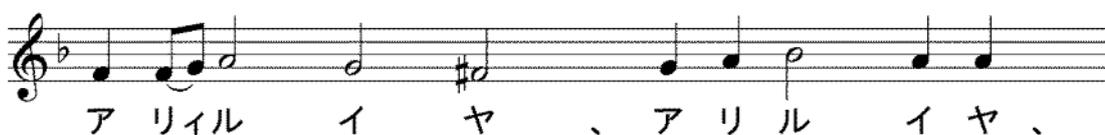
司祭) <sup>なんぢ へいあん</sup> 爾に平安、

誦經) <sup>なんぢ しん</sup> 爾の神にも、

司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、

誦經) <sup>ねが わ ため あだ かえ われ しよみん したが かみ さんしょう</sup> アリルイヤ、願わくは我が爲に仇を復し、我に諸民を従わしむる神は讚頌せら

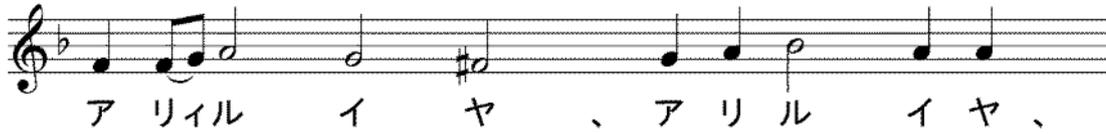
れん、



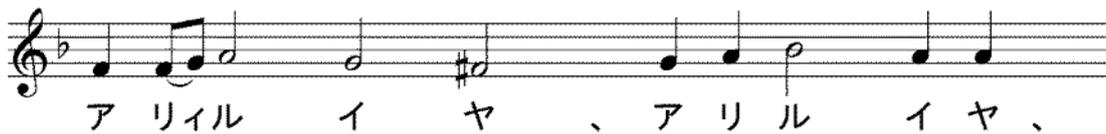


誦經) <sup>おお</sup>なる <sup>すく</sup>救を <sup>おう</sup>王に <sup>ほ</sup>施し、 <sup>あ</sup>憐 <sup>なん</sup>を <sup>ち</sup>爾の <sup>あ</sup>膏 <sup>ぶ</sup>つけられし <sup>もの</sup>者 <sup>お</sup>ダ <sup>よ</sup>ヴィ <sup>そ</sup>ド <sup>よ</sup>及 <sup>よ</sup>び <sup>よ</sup>其 <sup>よ</sup>裔 <sup>よ</sup>に <sup>よ</sup>世 <sup>よ</sup>世 <sup>よ</sup>に

<sup>た</sup>垂 <sup>もの</sup>る者 <sup>われ</sup>よ、 <sup>なん</sup>我 <sup>ち</sup>爾 <sup>な</sup>の <sup>う</sup>名 <sup>た</sup>に <sup>う</sup>歌 <sup>た</sup>わん、



誦經) <sup>し</sup>祝 <sup>く</sup>讃 <sup>さん</sup>せらるる <sup>かな</sup>哉 <sup>し</sup>主、 <sup>か</sup>イ <sup>み</sup>ズ <sup>け</sup>ラ <sup>だ</sup>イ <sup>し</sup>リ <sup>の</sup>の <sup>か</sup>神、 <sup>か</sup>蓋 <sup>み</sup>其 <sup>の</sup>民 <sup>を</sup>を <sup>か</sup>眷 <sup>え</sup>み <sup>り</sup>て、 <sup>こ</sup>之 <sup>れ</sup>に <sup>あ</sup>贖 <sup>が</sup>を <sup>な</sup>爲 <sup>を</sup>せ <sup>を</sup>り、



司祭) ( 黙誦: <sup>ひ</sup>人 <sup>を</sup>を <sup>あい</sup>愛 <sup>し</sup>する <sup>し</sup>主 <sup>ゆ</sup>宰 <sup>さ</sup>よ、 <sup>わ</sup>我 <sup>が</sup>心 <sup>に</sup>に <sup>し</sup>神 <sup>を</sup>を <sup>し</sup>知 <sup>ち</sup>る <sup>い</sup>智 <sup>ぎ</sup>慧 <sup>の</sup>の <sup>い</sup>淨 <sup>き</sup>き <sup>よ</sup>光 <sup>を</sup>を <sup>ひ</sup>輝 <sup>か</sup>し、 <sup>わ</sup>我 <sup>が</sup>思

<sup>ね</sup>念 <sup>の</sup>の <sup>め</sup>目 <sup>を</sup>を <sup>ひ</sup>啓 <sup>ら</sup>る <sup>を</sup>を <sup>て</sup>て、 <sup>なん</sup>爾 <sup>が</sup>福 <sup>ふ</sup>音 <sup>の</sup>の <sup>お</sup>教 <sup>を</sup>を <sup>し</sup>悟 <sup>ら</sup>し <sup>め</sup>給 <sup>え</sup>給 <sup>え</sup>、 <sup>わ</sup>我 <sup>が</sup>衷 <sup>に</sup>に <sup>なん</sup>爾 <sup>の</sup>の <sup>ふ</sup>福 <sup>く</sup>たる <sup>い</sup>誠 <sup>ま</sup>に

<sup>お</sup>を <sup>そ</sup>畏 <sup>る</sup>る <sup>お</sup>畏 <sup>れ</sup>をも <sup>い</sup>入 <sup>れ</sup>て、 <sup>わ</sup>我 <sup>ら</sup>等 <sup>が</sup>悉 <sup>く</sup>の <sup>こ</sup>肉 <sup>ご</sup>體 <sup>の</sup>の <sup>に</sup>慾 <sup>を</sup>を <sup>ふ</sup>踏 <sup>み</sup>、 <sup>お</sup>凡 <sup>そ</sup>爾 <sup>の</sup>の <sup>よ</sup>喜 <sup>ぶ</sup>ぶ

<sup>と</sup>所 <sup>を</sup>を <sup>おも</sup>思 <sup>い</sup>且 <sup>つ</sup>行 <sup>い</sup>て、 <sup>ぞ</sup>屬 <sup>し</sup>神 <sup>の</sup>の <sup>せ</sup>生 <sup>い</sup>活 <sup>を</sup>を <sup>か</sup>過 <sup>ぐ</sup>る <sup>を</sup>を <sup>す</sup>致 <sup>さ</sup>せ <sup>給</sup>給 <sup>え</sup>、 <sup>い</sup>蓋 <sup>た</sup>ハ <sup>り</sup>ス <sup>ト</sup>ス <sup>か</sup>神 <sup>み</sup>

<sup>なん</sup>よ、 <sup>わ</sup>爾 <sup>は</sup>我 <sup>が</sup>靈 <sup>と</sup>と <sup>た</sup>體 <sup>の</sup>の <sup>こ</sup>光 <sup>し</sup>照 <sup>な</sup>り、 <sup>わ</sup>我 <sup>ら</sup>等 <sup>爾</sup>と <sup>なん</sup>爾 <sup>の</sup>の <sup>む</sup>無 <sup>げ</sup>原 <sup>の</sup>の <sup>ち</sup>父 <sup>し</sup>と <sup>し</sup>至 <sup>せい</sup>聖 <sup>し</sup>至 <sup>し</sup>

<sup>ぜん</sup>善 <sup>に</sup>に <sup>い</sup>生 <sup>の</sup>命 <sup>を</sup>を <sup>ほ</sup>施 <sup>す</sup>爾 <sup>の</sup>の <sup>し</sup>神 <sup>と</sup>と <sup>こ</sup>に <sup>う</sup>光 <sup>えい</sup>榮 <sup>を</sup>を <sup>けん</sup>獻 <sup>ず</sup>ず、 <sup>いま</sup>今 <sup>いつ</sup>も <sup>よ</sup>何 <sup>よ</sup>時 <sup>よ</sup>も <sup>よ</sup>世 <sup>よ</sup>世 <sup>よ</sup>に、 <sup>あ</sup>ア <sup>み</sup>ン。 )

【 エヴァンゲリオン 福音經 マトフェイ福音書9端 6章22節~33節

ルカ福音書1端 1章1節~25節、57節~68節、76節、80節 】

司祭) 睿智、 肅みて立て聖福音經を聴くべし、 衆人に平安、



司祭) マトフェイ傳の聖福音經の讀、

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい  
主 光 榮 爾 歸 光 榮

はなんぢにきす。  
爾 歸

司祭) 謹みて聴くべし、彼の時イイス、ガリラヤの海邊に行く時、彼は兄弟二人、即ちシモン稱してペトルと曰う者、及び其兄弟アンドレイが、網を海に施せるを見たり、蓋彼等は漁者なりき。乃彼等に謂う、我に従え、我爾等を人を漁する者と爲さん。彼等直に網を遺して、之に従えり。彼處より往きて、別に兄弟二人、即ちゼヴェデイの子イアコフ及び其兄弟イオアンが、父ゼヴェデイと偕に舟に在りて、網を補えるを見て之を召せり。彼等直に舟と父とを遺して、之に従えり。イイス徧くガリラヤを巡りて、其諸會堂に於て教を傳え、天國の福音を宣べ、民間の諸の病もろもろ諸の疾を醫せり。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) さて、イエスがガリラヤの海べを歩いておられると、ふたりの兄弟、すなわち、ペテロと呼ばれたシモンとその兄弟アンデレとが、海に網を打っているのをごらんになった。彼らは漁師であった。イエスは彼らに言われた、「わたしについてきなさい。あなたがたを、人間をとる漁師にしてあげよう」。すると、彼らはすぐに網を捨てて、イエスに従った。そこから進んで行かれると、ほかのふたりの兄弟、すなわち、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネとが、父ゼベダイと一緒に、舟の中で網を繕っているのをごらんになった。そこで彼らをお招きになると、すぐ舟と父とをおいて、イエスに従って行った。イエスはガリラヤの全地を巡り歩いて、諸會堂で教え、御國の福音を宣べ伝え、民の中のあらゆる病気、あらゆるわずらいをおいやしになった。

\*\*\*\*\*

司祭) 我等の中に明に知られたる事、即ち始より言の實見者及び役者たりし者が我等に傳えたる事に就きて、多くの者が手を擧げて傳記を作るに因り、尊憲なるフェオフィルよ、我も凡の事を始より審に推し原ね、次第を以て爾の爲に書さんことのお思を起せり、爾が學びたる教の堅き基を知らん爲なり。イウデヤの王イロドの時、

アヴィヤの班に屬する司祭にザハリヤと名づくる者あり、其妻はアアロンの裔にして、名を  
エリサヴェタと云う。二人ながら神の前に義なる者にして、主の一切の誠命禮儀を虧くる  
なく行えり。彼等に子なかりき、エリサヴェタは妊まざる者たりし故なり、二人共に年已  
に老いたり。ザハリヤが其班の次に依りて、司祭の職を神の前に行うに値りて、司祭  
の例に循ひ、籤を掣きて、主の殿に入りて、香を焚くを得たり。香を焚く時、衆民外  
に在りて禱れり。主の天使ザハリヤに現れて、香壇の右に立てり。ザハリヤ之を見て、驚  
き且懼れたり。天使彼に謂えり、ザハリヤ懼るる勿れ、蓋爾の祈禱は聞かれたり、爾  
の妻エリサヴェタ子を生まん、爾之をイオアンと名づけん。爾には喜と樂とあらん、  
且多くの者は其生るるに因りて悦ばん。蓋彼は主の前に大なる者とならん、酒と  
諸醪とを飲まず、其母の胎よりして聖神に充てられん。彼はイズライリの諸子の多くの者  
を轉じて、主彼等の神に歸せしめん。彼はイリヤの精神と能力とを以て主の前に行か  
ん、父の心を子に、逆う者を義者の智慧に歸らしめて、備えられたる民を主に進めん爲  
なり。ザハリヤ天使に謂えり、我何を以て之を知らん、蓋我老いたり、我が妻も年邁け  
り。天使彼に答えて曰えり、我はガヴリイル、神の前に立つ者なり、使を奉じて爾に  
告げ、爾に此の福音を爲す。視よ、爾瘡となり、言ふ能わずして、此の事の成る日に至  
らん、我が言を信ぜざりし故なり、是の言は時に及びて必應わん。時に民はザハ  
リヤを候ちて、其殿の内に久しく在るを奇めり。遂に出でて彼等に言う能わざれば、乃  
其殿の内に異象を見しことを曉れり、彼は首を以て彼等に意を示し、而して瘡た  
りき。其職事の日満つるに及びて、家に歸れり。此の日の後、其妻エリサヴェタ妊みて、隠  
れ居りしこと五月にして曰えり、主は斯く我に爲せり、彼は此の日に於て我を眷みて、我  
が耻を人人の間に洒がしめたり。エリサヴェタに産期届りて、乃子を生まり。彼の近  
隣と親戚とは、主が其大なる矜恤を彼に垂れしを聞きて、彼と偕に喜べり。第八  
日に及びて、子に割禮を行わん爲に來り、之を其父の名に依りて、ザハリヤと名づけん

とせしに、其母<sup>そのは</sup> 答<sup>こた</sup>えて曰<sup>い</sup>へり、否<sup>いな</sup> 之<sup>これ</sup>をイオアンと名<sup>な</sup>づく可<sup>べ</sup>し。彼等<sup>かれらい</sup>曰<sup>なんぢ</sup>えり 爾<sup>しんせき</sup>が親<sup>うち</sup>戚<sup>うち</sup>の中

に一人<sup>ひとり</sup>も此<sup>こ</sup>の名<sup>な</sup>を名<sup>な</sup>づくる者<sup>もの</sup>なし。遂<sup>つい</sup>に其<sup>その</sup>父<sup>ちち</sup>に形<sup>しるし</sup>を以<sup>もつ</sup>て如何<sup>いか</sup>に之<sup>これ</sup>を名<sup>な</sup>づけんと欲<sup>ほつ</sup>するを

問<sup>と</sup>いしに、彼<sup>かれ</sup>簡<sup>ふだ</sup>を請<sup>こ</sup>いて書<sup>しる</sup>して曰<sup>い</sup>えり、其名<sup>そのな</sup>はイオアンなりと、皆<sup>みな</sup>之<sup>これ</sup>を奇<sup>き</sup>とせり。直<sup>ただち</sup>に其<sup>その</sup>

口<sup>くち</sup>啓<sup>ひら</sup>け、舌<sup>した</sup>解<sup>と</sup>け、彼<sup>かれ</sup>言<sup>ことば</sup>を發<sup>はつ</sup>して、神<sup>かみ</sup>を祝<sup>しゅく</sup>讃<sup>さん</sup>せり。其<sup>その</sup>近<sup>きん</sup>隣<sup>りん</sup>の者<sup>もの</sup>皆<sup>みな</sup>懼<sup>おそ</sup>れ、且<sup>かつ</sup>此<sup>これら</sup>等の

事<sup>こと</sup>遍<sup>あまね</sup>くイウデヤの山<sup>さん</sup>地<sup>ち</sup>に揚<sup>あが</sup>がれり。凡<sup>およ</sup>そ聞<sup>き</sup>きし者<sup>もの</sup>其<sup>その</sup>心<sup>このころ</sup>に之<sup>これ</sup>を藏<sup>おさ</sup>めて曰<sup>い</sup>えり、此<sup>こ</sup>の子<sup>こ</sup>は

如何<sup>いか</sup>にならんと、主<sup>しゅ</sup>の手<sup>て</sup>は彼<sup>かれ</sup>と偕<sup>とも</sup>にせり。其<sup>その</sup>父<sup>ちち</sup>ザハリヤ聖<sup>せい</sup>神<sup>しん</sup>に満<sup>み</sup>てられ、預<sup>よげん</sup>言<sup>い</sup>して曰<sup>い</sup>えり、

祝<sup>しゅく</sup>讃<sup>さん</sup>せらるる哉<sup>かな</sup>主<sup>しゅ</sup>、イスライリ<sup>いすらいり</sup>の神<sup>かみ</sup>、蓋<sup>けだし</sup>其<sup>その</sup>民<sup>たみ</sup>を眷<sup>かえり</sup>みて、之<sup>これ</sup>に購<sup>あが</sup>を爲<sup>な</sup>せり。子<sup>こ</sup>よ、

爾<sup>なんぢ</sup>も至<sup>しじょう</sup>上<sup>しや</sup>者<sup>よげん</sup>の預<sup>と</sup>言<sup>な</sup>者<sup>けだし</sup>と稱<sup>しゅ</sup>えられん、蓋<sup>めん</sup>主<sup>ぜん</sup>の面<sup>ゆ</sup>前<sup>その</sup>に行<sup>のみち</sup>きて、其<sup>その</sup>道<sup>みち</sup>を備<sup>そな</sup>えん。子<sup>こ</sup>は漸<sup>よう</sup>や

く成<sup>せい</sup>長<sup>ちやう</sup>し、精<sup>せい</sup>神<sup>しん</sup>益<sup>ます</sup>強<sup>ます</sup>健<sup>きよ</sup>にして、其<sup>その</sup>イスライリに顯<sup>あらわ</sup>る日<sup>ひ</sup>に至<sup>いた</sup>るまで野<sup>の</sup>に居<sup>を</sup>りき。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) わたしたちの間に成就された出来事を、最初から親しく見た人々であって、御言に仕えた人々が伝えたとおりの物語に書き連ねようと、多くの人が手を着けましたが、テオピロ閣下よ、わたしもすべての事を初めから詳しく調べていますので、ここに、それを順序正しく書きつづって、閣下に献じることになりました。すでにお聞きになっている事が確実であることを、これによって十分に知っていただきたいためであります。ユダヤの王ヘロデの世に、アビヤの組の祭司で名をザカリヤという者がいた。その妻はアロン家の娘のひとりで、名をエリサベツといった。ふたりとも神のみまえに正しい人であって、主の戒めと定めとを、みな落度なく行っていた。ところが、エリサベツは不妊の女であったため、彼らには子がなく、そしてふたりともすでに年老いていた。さてザカリヤは、その組が当番になり神のみまえに祭司の務をしていたとき、祭司職の慣例に従ってくじを引いたところ、主の聖所にはいって香をたくことになった。香をたいている間、多くの民衆はみな外で祈っていた。すると主の御使が現れて、香壇の右に立った。ザカリヤはこれを見て、おじ惑い、恐怖の念に襲われた。そこで御使が彼に言った、「恐れるな、ザカリヤよ、あなたの祈が聞きいれられたのだ。あなたの妻エリサベツは男の子を産むであろう。その子をヨハネと名づけなさい。彼はあなたに喜びと楽しみとをもたらし、多くの人々もその誕生を喜ぶであろう。彼は主のみまえに大いなる者となり、ぶどう酒や強い酒をいっさい飲まず、母の胎内にいる時からすでに聖霊に満たされており、そして、イスラエルの多くの子らを、主なる彼らの神に立ち帰らせるであろう。彼はエリヤの霊と力とをもって、みまえに先立って行き、父の心を子に向けさせ、逆らう者に義人の思いを持たせて、整えられた民を主に備えるであろう」。するとザカリヤは御使に言った、「どうしてそんな事が、わたしにわかるのでしょうか。わたしは老人ですし、妻も年をとっています」。御使が答えて言った、「わたしは神のみまえに立つガブリエルであって、この喜ばしい知らせをあなたに語り伝えるために、つかわされたものである。時が来れば成就するわたしの言葉を信じなかったから、あなたはおしになり、この事の起る日まで、ものが言えなくなる」。民衆はザカリヤを待っていたので、彼が聖所内で暇どっているのを不思議に思っていた。ついに彼は出てきたが、物が言えなかったので、人々は彼が聖所内でまぼろしを見たのだと悟った。彼は彼らに合図をするだけで、引きつづき、おしのままでいた。それから務の期日が終わったので、家に帰った。そののち、妻エリサベツはみごもり、五か月のあいだ引きこもっていたが、「主は、今わたしを心にかけてくださって、人々の間からわたしの恥を取り除くために、こうしてくださいました」と言った。さてエリサベツは月が満ちて、男の子を産んだ。近所の人々や親族は、主が大きなあわれみを彼女におかけになったことを聞いて、共どもに喜んだ。八日目になったので、幼な子に割札をするために人々がきて、父の名にちなんでザカリヤという名にしようとした。ところが、母親は、「いいえ、ヨハネという名にしなく

てはいけません」と言った。人々は、「あなたの親族の中には、そういう名のついた者は、ひとりもいません」と彼女に言った。そして父親に、どんな名にしたいのですかと、合図で尋ねた。ザカリヤは書板を持ってこさせて、それに「その名はヨハネ」と書いたので、みんなの者は不思議に思った。すると、立ちどころにザカリヤの口が開けて舌がゆるみ、語り出して神をほめたたえた。近所の人々はみな恐れをいだき、またユダヤの山里の至るところに、これらの事がことごとく語り伝えられたので、聞く者たちは皆それを心に留めて、「この子は、いったい、どんな者になるだろう」と語り合った。主のみ手が彼と共にあった。父ザカリヤは聖霊に満たされ、預言して言った、「主なるイスラエルの神は、ほむべきかな。神はその民を顧みてこれをあがなう。幼な子よ、あなたは、いと高き者の預言者と呼ばれるであろう。主のみまえに先立って行き、その道を備えるのだから。幼な子は成長し、その霊も強くなり、そしてイスラエルに現れる日まで、荒野にいた。

\*\*\*\*\*

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい  
 主 光 榮 爾 歸 光 榮

はなんぢにきす。  
 爾 歸

※聖体礼儀③ へ